

社会学におけるオルテガ

Ortega y Gasset in Sociology

木下 智 統

Tomonori KINOSHITA

1. はじめに

ホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset 1883-1955) は、20世紀のスペインを代表する哲学者、思想家である。彼の著作は祖国のみならず、ヨーロッパ、アメリカ大陸、そして日本でも受け入れられた。

1933年、日本に彼の思想が導入されて以降、現在に至るまで、研究書、研究論文等が発表され、今なお研究が進められている。その内容は哲学、思想の分野のみならず、多岐にわたっており、オルテガ思想の幅広さを裏付けるものとなっている。

こうした長きにわたるオルテガ研究期間についてその分析を進めるため、以下、四つの期間に区切る。

① 第一期 (1933年～1955年)

日本におけるオルテガ導入の年から、オルテガがその生涯を終える1955年までの期間。『大衆の反逆』の発刊がこの期間に含まれる。太平洋戦争、敗戦後の混乱など、学問を取り巻く社会環境は厳しいものであったが、こうしたこの期特有の状況が一部の知識人たちをオルテガ思想受容へと向かわせたことが確認できる。

② 第二期 (1956年～1975年)

オルテガが他界した翌年からアンセルモ・マタイスが『ウナムーノ、オルテガ研究』を著した1975年までの期間。この期間では、オルテガの幅広い思想分野のそれぞれに光が当たり始め、オルテガ思想の受容が大きく進展した。また、白水社から刊行された邦訳『オルテガ著作集』の登場は、あらゆる分野の人々にオルテガの思想にふれる機会を与えた。

③ 第三期 (1976年～1992年)

第二期の継続となる1976年から、「スペインイヤー¹⁾」と言われた1992年までの期間。前期と同様、引き続きオルテガ研究は進展を見せるが、特に1992年に至るまでの数年間は過去、類を見ないほどの論文、著書、雑誌記事などが公表され、一般社会においてだけでなく、学術の領域においても大きな盛り上がりを感じる期間となった。

1) スペインイヤーとは、コロンブスの「新大陸到達」、またイスラム勢力から国土を完全に回復した年である1492年から500周年目にあたる、1992年を指す。1986年の欧州連合加盟から徐々にその存在感を取り戻しつつあったスペインは、この年、セビリア万博、バルセロナオリンピックの開催により、世界的に大きな注目を浴びた。

④ 第四期 (1993年～現在)

1993年から現在に至るまでのこの期間には、世紀末、新世紀が含まれるため、20世紀を概観する上でオルテガの大衆社会論が取り上げられるなど、他の期間にはない時間的な特色がある。

本論考で考察対象とするオルテガ研究期間は、第三期 (1976年～1992年) である。この第三期では、オルテガ研究は、質、量ともに大きな発展を見せ、他の期間にはない展開と特質が認められた。こうしたことから、まず第三期について、学問分野別にオルテガ思想がどのように受容されたかを検討した。続いて、そこから特筆すべき展開と特質が認められる、社会学の分野について、社会学者のオルテガ思想の受容に迫った。

本論考はオルテガ本来の学問分野とは異なる、社会学の分野において、どのようにオルテガ思想が受け入れられ、どのように定着していったか、こうした点を浮き彫りとすることを目的としている。

2. 第三期におけるオルテガ思想受容について

先に挙げたオルテガ思想受容の四期間のうち、ここからは第三期 (1976年～1992年) におけるオルテガの幅広い思想分野に焦点を合わせ、それらの展開と特質について分析を行う。まずは第三期について、その期間設定の基準を明確にしておく。

1976年から始まる第三期オルテガ研究の期間については、先の二つの期間とは違い、20年間を一つの区切りとはせず、1992年をもって区切りとした。それまでの研究期間の区分について振り返ると、第一期は初めてのオルテガ思想導入から彼が他界するまでの20年間を一つの期間として設定し、続く第二期も同

様の年月での動きを比較するためにこれに倣った。こうしたことから、第三期の区分についても同様の年月の中でいかなる研究史が積み重ねられたのかを比較検討するためには、20年間という同年数で一区切りとすることが望ましいと思われた。しかし、資料の調査を進めていくと、1976年から1992年までに刊行された論文、研究書、翻訳そして雑誌記事等は、他の全期間と比較しても突出した増加傾向をみせていることが明らかとなった。その数は、日本においてオルテガ思想が受容され始めた1933年から現在までの期間に刊行されたもののおよそ三分の一²⁾にあたる。

だが、このことは日本におけるオルテガ研究が成熟してきたことだけをその理由とせず、先に挙げた、スペインイヤーという、それまでに前例を見ない特殊な外部要因が影響した結果ととらえるべきであろう。そこで第三期はこのスペインイヤーを期間の区切りとし、この外部要因が影響を見せなくなる翌年以降を第四期と設定することとした。以上から、各期間について極めて簡素にまとめるならば、第一期はオルテガの導入期であり、続く第二期はオルテガ思想の導入と各方面における検討が開始された期間である。こうした内部における静的な動きで進展した時期に対し、続く第三期はスペインイヤーという外的要因によって研究の進展が促された期間であった。

では、第三期オルテガ研究期間において発行された、論文、研究書、翻訳、そして記事等について、オルテガの幅広い思想分野の中から特筆すべきものを取り上げ、この期間の

2) オルテガに関連した論文、研究書、翻訳そして雑誌記事等の総数は現在のところ、300を超えるが、近年のオンラインデータベースシステムの構築に伴い、新しく発行されるものだけでなく、過去の発行物も順次、掲載されている。こうした現状は一方で、新しい資料の発見にもつながるが、他方で、その総数を厳格に限定するを困難としている。

展開と特質について浮き彫りとしていたい。

まず取り上げるのは、第三期においてオルテガ研究の「深化」が認められる二つの分野、哲学とオルテガ著作の翻訳についてである。

オルテガの主たる学問領域である哲学の分野では、目覚ましい深化が認められる。それは、この期間に刊行されたオルテガ関連の論文や研究書等の数からまずは窺い知ることができよう。第二期における同分野の刊行物と第三期の刊行物とを比較すると、三倍以上の数の刊行物が第三期において確認できる。また、同様に、数に注目して見るならば、研究者の数の増加も忘れてはならない。第二期がアンセルモ・マタイスを始めとした、少数の研究者たちによって進められていたのに対して、第三期では研究者たちの数も刊行物と同じく、大幅に増加した。そして、目覚ましい深化は扱われる哲学的テーマの細分化からも見てとれる。第二期までの主要なテーマはオルテガ哲学の最も基本的なテーマである、「生・理性主義」について検討するものがその中心を占めた。これに対し、第三期ではもはや基本的なテーマを単独で扱うものは存在せず、オルテガ研究が次の段階へと進んだことが理解される。

こうして目覚ましい深化が認められる哲学の分野であるが、最後に、この期間において特に重要な意味を持つ書を挙げておきたい。それは色摩力夫の『オルテガ』である。同書はその副題を「現代文明論の先駆者」と表記しているように、オルテガの文明論を扱っている。だが、色摩が「オルテガの文明論の論点には、すべて独特の哲学的根拠が用意されている³⁾」と述べているとおり、オルテガの文明論はオルテガの生の哲学を基にして組み立てられた、いわば、オルテガ自身の思想的深化としての文明論である。こうした彼の文

3) 色摩力夫『オルテガ』, pp.233-234.

明論へとオルテガ研究が進んだこと自体、まさにオルテガ研究の深化が認められることに他ならない。

続いて、オルテガ著作の翻訳における深化についても検討しておく。

オルテガの主要な著作は第二期において、すでに『オルテガ著作集』として刊行されている。そのため、第三期の段階では、それまでとは違い、盛んな翻訳活動はもはや確認できない。しかしながら、主要な、という言葉が意味するとおり、すべての著作が翻訳されたわけではなかった。そうした、『オルテガ著作集』に収納されなかった著作について翻訳を進め、オルテガ研究のさらなる土壌作りに貢献した研究者に、西澤龍生がいる。彼はオルテガに匹敵する表現力を駆使して、オルテガの作品のそれぞれが持っていた幅と深みを余すところなく流麗な日本語で翻訳した。この点は、明らかに他の翻訳者たちと一線を画すものである。なお、彼は第二期における『反文明的考察⁴⁾』の翻訳から、第三期、第四期、と長きに渡り翻訳活動に従事してきたが、オルテガ著作の翻訳における深化、という面でもとらえるならば、先の著作集が刊行された後の第三期以降の翻訳活動がそれに当たると、この期で取り上げておく。

次に、上記までに検討した「深化」に至る前段階、つまり「進展」があった、と認められる分野について取り上げる。それらは教育

4) 同書の初版は1966年に発行されたが、その12年後の1978年に改版がなされている。西澤はその中の「改版あとがき」において、日本におけるオルテガ研究について、当時の状況を知る上で、次のような重要な記述を残している。「オルテガにとっても我国は当時とは比較にならぬ住み心地であろうと考える。(中略)『オルテガ著作集』(白水社)なるものすら上梓された東海のこの島国が、知己の多さにおいて、昔日の比ではないことは明らかである。」(p.326.) このように12年というわずかな期間のうちに、急速なオルテガ理解が進展していたことが理解される。

学と社会学である。なお、社会学の分野については後に検討を行うため、ここでは進展があったことを指摘するに止める。

教育学の分野におけるオルテガ研究の起点はオルテガの『大学の使命』に求められる。文字通り、大学論を扱った同書では、専門化傾向を強める大学教育の現状に対して、一般教育の意味とその重要性が説かれている。第二期オルテガ研究期間の段階において、この理論は日本へと導入され、その後の第三期では、今村温之が、オルテガの大学論は生の哲学、世代論、そして歴史主義の考察を通して構成された理論的体系を有したものであることを分析した⁵⁾ように、教育学の分野においてオルテガ研究が進展を見せるようになった。

続いて、この期間に初めてオルテガ思想が「受容」された分野についても検討しておく。

第三期において、オルテガ思想が初めて受容された分野として代表的なものに、経済学が挙げられる。とは言っても、その内容は経済学者によるオルテガへの接近とみる方が正しいだろう。なぜなら、経済学の分野でオルテガが論じられたわけではなかったためである。経済学者とオルテガを結び付けたもの、それはオルテガが『大衆の反逆』で展開した大衆論であった。こうした経済学者の一人に、オルテガ研究者として名高い西部邁がいる。彼がそれまでのエッセイや記事等をまとめ、『大衆への反逆』との題で発刊したところにもオルテガの影響を感じさせるが、オルテガに共感する理由もこの中で述べられている⁶⁾。西部によるオルテガ大衆理論の積極的受容と止揚については、別に原稿を改めて分析を行う。

また、オルテガの司書論も第三期において初めて受容された分野である。この分野につ

いては情報社会での司書の役割について論じた田中の論文⁷⁾を取り上げておきたい。

田中は「アメリカ図書館界でのオルテガ論争を紹介し、情報専門職についての考察の一助としたい⁸⁾」、と述べているとおり、オルテガが提起した司書のあるべき姿について、アメリカでどのような検討が行われていたかを順を追って考察している。このように、田中の論文は第三期において、オルテガの司書論が受容されたことを確認する、という意味と他国におけるオルテガ研究がどのように進展していたかを探る資料、という二つの観点から貴重な論文であると言える。

最後に、二十世紀を概観する上でオルテガが取り上げられた事例について指摘して本章を終えることにする。

世紀をまたぐ段階になると去りゆく百年の総括が行われることは過去の資料が示すとおりである。二十世紀末が目前となってきた第三期の終盤には、「二十世紀の十冊⁹⁾」と題する特集が『文藝春秋』で生まれ、二人の研究者と一人の評論家がそれぞれ二十世紀を代表する書を十冊選択した。この中でオルテガの『大衆の反逆』は、三者に共通して選ばれた。オルテガが日本に導入されてから約六十年、日本においてもその存在がようやく認知されたことを示す特集ではなかっただろうか。

3. 社会学における定着

第三期においてオルテガの思想が多分野に及び、またそれぞれの分野において深化が見られたことを先に確認した。そうした幅広い分野に及んだオルテガ思想の内、社会学の分野はその受容が特に進んだ分野のひとつであ

7) 田中久徳「情報社会での図書館員の役割—オルテガの評価をめぐる—」。

8) 同上, p.1.

9) 入江隆則他「文春ブッククラブ・スペシャル 二十世紀の十冊 今読めばなお面白い、新しい、ためになる十冊」。

5) 今村温之「オルテガの一般教育理論」。

6) 西部 邁『大衆への反逆』, pp.178-181.

る。その要因はオルテガの主著『大衆の反逆』に求められるだろう。オルテガは、社会を構成する二つの要素として大衆と少数者の概念を提示し、それぞれについて考察を展開した後、先の大衆とは異なる、新たな人間のタイプとしての「大衆」の概念を生み出した。大衆、少数者、そして新しいタイプの「大衆」が台頭する社会について、オルテガの生・理性哲学を基に丹念な分析を行った。

哲学を基にした大衆論、大衆社会論が展開された同書は、時間とともにその是非を巡って哲学者のみならず、社会学者をも議論の場へと導いた。そして、その足跡として、社会学者たちによる数多くの研究論文、研究書が残されたのである。このように第三期においては、社会学者たちによるオルテガ思想への接近が本格化する。つまり、「社会学におけるオルテガ」が定着していくのである。

しかし、そうした傾向はいつからどのようにして始まったのだろうか。ここではこうした社会学の分野での認知と定着化までの展開について、高橋徹をはじめとする社会学者たちを通して考察を行う。

1979年に発行された『マンハイム・オルテガ 世界の名著<56>』は、第三期に発行されたオルテガ関連の書物のうち、特に重要な意味を持つ。同書は、社会学者、高橋による解説、マンハイムの「イデオロギーとユートピア」、そしてオルテガの「大衆の反逆」によって構成されている。マンハイムとオルテガを結び付けているものはエリート主義的性格の強い大衆社会論という接点¹⁰⁾である。

ここで重要なことは解説の高橋をはじめ、マンハイムとオルテガを結び付けた、編集委

員の尾高邦雄、そして付録と名の付く、小冊子にて両者の紹介をおこなった山口節郎に至るまでの全員が社会学者であったという点である。つまり、誰もオルテガの本来的な学問領域である哲学の専門家でもなければ、オルテガ研究者でもなかった。高橋¹¹⁾と山口¹²⁾の両者が述べているように、彼らは自分たちにオルテガを解説する資格がないことを十分に認識していた。オルテガを解説するならば、彼の哲学についてふれなくてはならないことを理解していたのである。にもかかわらず、彼らが書物の出版を行い¹³⁾、オルテガについて解説を行ったことは社会学の分野においても、オルテガが十分に認知されていたことを示している。解説において、社会学者であるマンハイムとの関連性が詳細に述べられている¹⁴⁾ことから社会学におけるオルテガの妥当性は疑いようのないものとなっている。

次に、高橋が行ったオルテガ解説から、社会学におけるオルテガについてさらなる検討を加えていきたい。しかし、まずは高橋がオルテガという人物をどのようにとらえていたかについて見てみよう。

高橋は、オルテガの哲学者、思想家としての面に加え、オルテガを道徳哲学者ともとらえていた¹⁵⁾ことから、多方面にわたるオルテガの思想のそれぞれに高い専門性を見出していたとみるのが適切であろう。しかしながら、オルテガの学者としての気風については、受け入れがたい面があった。こうしたオルテガへの評価については次の記述にまとめられている。

11) 同上, p.66.

12) 同上, 付録48, p.1.

13) 東京大学と大阪大学の研究者たちによって編纂されたこともこの本が持つ影響力を暗に物語るのではないだろうか。

14) 同上, pp.65-66.

15) 同上, p.66.

10) 実際には両者の間に、さらなる親和性があることが述べられているがここでは割愛する。詳しくは、高橋徹編『マンハイム・オルテガ 世界の名著』pp.65-66.を参照されたい。

無用な修飾をいっさいとりはらい、理念を形而上学的詩に近い形式にくるんで提示する文体、具体的な描写のなかにふんだんにちりばめられている深い含意を秘めた隠喩の使用、マラガの闘牛からアインシュタインの相対性理論にいたるまでの論評範囲の幅の広さ、それに、つねにその人格の深層で問題を受けとめ、論理的斉合性よりも、その問題に立ち向かう自己の誠実性をにじみださせているような書きぶり。一言でいって、硬質の知性が示す「精神の貴族性」が軟弱な私の「大衆化した知性」のまえにたちはだかるのである。救いようのない卑小感と、偉大なものにたいするよこしまな憎悪のなかで悶死するよりも、敬して遠ざけるにしかず¹⁶⁾。

高橋は、オルテガが日本において受容された初期から常に評価されてきた、卓越した文才と幅広い思想を評価する一方、オルテガが持つ貴族的な姿勢、つまりはエリート主義と高橋が理解するものについて好感を持てなかったようである。ただし、すべてのエリート主義者に対して、同じ感情を持っていたわけではない。彼はモスカ、ミヘルス、パレート、そしてオルテガを「エリート主義的大衆観」という一つの枠組みでとらえ、批判的な態度で臨んだ。だが、モスカ、ミヘルス、パレートには違和感を覚えなかったのに対して、オルテガだけには強烈な違和感を覚えたと述べている¹⁷⁾。それではこの違和感とは一体、何であろうか。高橋はそれが何なのかについては具体的に述べていないが、その手がかりは「解説」を書くために、オルテガについて苦

学を重ねた後にたどり着いた、彼の心境を述べた部分に見出すことができる。

そして、気がついたことは、オルテガが、「私は、私と私の環境である」という命題を、生涯をかけて「哲学した」人であったということだった。・・・（中略）・・・

自己にたいして多少気恥ずかしくはあったが、よそよそしさのなかにあったオルテガが、感動のなかに漂う想いだった。と同時に、「私は、私と私の環境である」という、社会学の中心命題の完全理解を通してはじめて、主著『大衆の反逆』にたどりつけるのだということがわかった¹⁸⁾。

こうして高橋は、オルテガが生涯、貫き通した彼の命題の理解なくして、『大衆の反逆』で展開されている大衆論を理解することは不可能である、との結論に至る。そしてこの思いから、彼はオルテガの命題の理解へとその歩みを踏み出すのである。

オルテガの命題を完全に理解するために、高橋はまず、命題を生成、発展、完成という段階別に分け、順を追って検討を加えた。哲学者、オルテガが生涯持ち続けた命題への接近、言い換えれば、それはオルテガ哲学への接近に他ならない。しかしながら高橋はオルテガの命題を「社会学の中心命題」としてとらえているように、オルテガの哲学と真正面から向き合いながらも、オルテガにおける社会的側面を見ていた。同様のことは、オルテガへの理解を試みる最初の段階において、「オルテガの社会学¹⁹⁾」という言葉が使われているところにも表れている。おそらく高橋は当初、哲学の領域におけるオルテガにまっ

16) 同上, p.67.

17) 同上, p.67.

18) 同上, p.68.

19) 同上, p.67.

たく興味を持っておらず、社会学の領域におけるオルテガを何とか見出そうとしたのではないだろうか。こうした思いが「オルテガの社会学」という言葉や、「社会学の中心命題」という表現につながったのであろう。しかしながら、オルテガの哲学を理解する必要性を感じたために、哲学の領域におけるオルテガへと主眼を移したと思われる。つまり、オルテガ理解の観点を社会学的観点のみに求める段階から哲学的観点を中心としながらも、社会学的観点を合わせ持つ段階へと移っていくのである。オルテガ理解への長い闘いは、オルテガの学問的気風に嫌気を感じながら、哲学的理解と社会学的理解を繰り返しながら進められていったものであろう。こうして高橋は、最終的に両方の観点を合わせ持つ、「社会哲学²⁰⁾」という言葉をもってオルテガの学問領域を集約する。これこそが高橋が苦学の末にたどり着いたオルテガの命題への理解であり、『大衆の反逆』を完全に理解する前提となるものであった。

こうして高橋の関わりを通して、『マンハイム・オルテガ 世界の名著』は社会学の分野にオルテガを定着させたという点で大きな意味を持つ。そしてここから『大衆の反逆』自体も哲学の書ではなく、社会学の書としての評価を受ける向きが定着し、社会学の分野でもオルテガ研究が進展するのである。つまり、社会学の分野におけるオルテガの定着と進展である。だが、高橋が社会学的な観点のみに執着しなかったことも忘れてはならない。この段階ではオルテガの哲学は取り去られておらず、むしろ高橋が示したように重要な意味を持つものであった。

4. 社会学における一般化へ

高橋とともに社会学におけるオルテガに着目した研究者に藤竹暁がいる。高橋がオルテガの哲学的部分と向き合いながらも、社会学的部分を浮き彫りにしようとしたのとは対照的に、藤竹はまったくと言っていいほどオルテガの哲学にふれることなく、『大衆の反逆』について社会学的見地から分析を行った。高橋が社会学におけるオルテガ思想の定着の契機となったとすれば、藤竹はオルテガの名を社会学の分野において一般化させたことになるだろう。なぜなら、藤竹はオルテガの哲学を省いた、社会学の分野でのオルテガ研究の可能性を提示したためである。では、藤竹が行った、オルテガ哲学を排した形でのオルテガ思想の分析とはいかなるものか。

藤竹は大衆と大衆の心理について研究を行っていた社会学者である。『大衆政治の社会学』はそんな彼がいくつかの雑誌で連載したものを編集、出版したものであった。連載の当初の目的は「現代社会を彩る大衆的で、大量的な現象の根底に潜む、一方では孤独を恐れ、密集を厭いつつ、にもかかわらず孤独を求め、密集に身を浸す大衆心理をえがくこと²¹⁾」であった。こうした目的において、藤竹はギュスターヴ・ル・ボンを中心に幾人かの学者、思想家を取り上げ、彼らが大衆についてどのように考察したかを丹念に検討した。オルテガはそうした中の一人として検討の対象に加えられていた。『大衆の反逆』が出版当初から世界的な評価を得ていたことを考えれば特に不思議ではない。

さて、先述したように藤竹はオルテガの哲学領域には興味を示さない。藤竹の興味はあくまでも大衆という概念、存在に向けられていた。このため、彼はオルテガの著作の内て

20) 同上, p.90.

21) 藤竹暁『大衆政治の社会学』, まえがき, p.ii.

も大衆について最も分析がなされたものである、『大衆の反逆』についてのみ考察の対象とするのである。

藤竹の考察は大きく分けて、次の三つの展開に分けられる。まずは、『大衆の反逆』に至るまでの系譜をル・ボンに求め、次にオルテガの大衆論を他の学者、思想家たちとの関わりから論じ、そして最後にオルテガのエリート論を他の学者、思想家たちと比較して、その独自性に迫るのである。では、藤竹の考察を三つの展開に沿って見てみよう。

藤竹はまず、『大衆の反逆』への系譜について検討を行う。藤竹によれば、『大衆の反逆』はル・ボンの『群衆の心理』の延長線上にあるものとしてとらえられる²²⁾。つまり、大衆論、大衆社会論の系譜はル・ボンからオルテガへと受け継がれたと考えていた。しかしながら、両者においては大衆、群衆をとらえる視点において違いが認められる²³⁾。また、ル・ボンが大衆をいかに操作するかという点にまで論を進めた²⁴⁾のに対し、オルテガにおいては大衆操作の概念は語られていないため、ここに両者におけるさらなる相違が明らかとなる。こうしたことから、ル・ボンの書が一般的に広く受け入れられただけでなく、現実政治の場面においても影響力を発揮したのに対し、オルテガの書は思想界を舞台として、その後の大衆社会論の展開方向を決定付けたのであった²⁵⁾。

こうして、ル・ボンとオルテガについて比較分析を行った藤竹は、続いて『大衆の反逆』における大衆の概念について検討を加えていく。

藤竹は、オルテガが新たに生み出した大衆の定義に独自性²⁶⁾を認めながらも、部分的に

はゲオルク・ジンメルの影響が認められる点を指摘し、オルテガにおける大衆の概念がオルテガのみによって生み出されたものではなかったことを述べている²⁷⁾。また、オルテガが意識的に批判を行った対象として、シュペングラーの『西洋の没落』を取り上げ、両者の作品における大衆の概念について比較を行い、オルテガ大衆論の独自性を見出すのである²⁸⁾。

そして、最後に藤竹は、大衆と対極に位置する存在としてオルテガにおける少数者の概念、つまりエリートについて考察を行う。

藤竹はオルテガにおけるエリート理論については、パレートと同一の系譜であると述べ、両者の共通点を指摘している²⁹⁾。しかしながら、オルテガの描くエリート像はすべての点でパレートと共通していたわけではない。「パレートとオルテガが正反対の方向を向いているのは、選ばれた少数者であるエリートの資質についてであった³⁰⁾」とも述べているように、オルテガのエリート理論には独自性が認められることを指摘した。

こうして『大衆の反逆』に至るまでの系譜、そして同書における大衆の概念、少数者であるエリートの概念に至るまで、藤竹は幾人もの学者たちとの比較検討を行うことにより、オルテガの大衆論が、一方では他の学者たちと共通した部分を持ち合わせていたことから時代の風潮に合ったものであることを明らかとし、他方では他の学者たちには認められない、オルテガの独自性を浮き彫りとすることで、『大衆の反逆』の持つ意義を明らかとしたのである。

さて、上記までのとおり、藤竹の考察内容

22) 同上, p.157.

23) 同上, p.154.

24) 同上, p.155.

25) 同上, p.156.

26) 同上, pp.160-164.

27) 同上, p.164, p.170.

28) 同上, p.173.

29) 同上, p.174.

30) 同上, p.174.

を追ってきたが、実はオルテガとそれぞれの学者たちとの比較は、アメリカでの先行研究を基にしたものであった。また、オルテガの大衆の概念についてもすでに盛んにオルテガ研究が行われていた、アメリカでの先行研究を用いている。こうした海外での先行研究を用いたことはどのような意味を持つのだろうか。

藤竹が考察を進める下支えとして、意図して海外でのオルテガ研究を採用したのか、それとも国内でのオルテガ研究が未整備であったからこそ海外でのオルテガ研究を取り入れたのかは不明である。しかし、当時の日本において、社会学的な観点からのオルテガ研究は文献が確認できないことから、まだ未発達であったことは間違いない。加えて、国内の先行研究を学者である藤竹が確認しなかったことは考えにくいであろう。いずれにせよ、藤竹は社会学の分野における海外でのオルテガ研究を、日本のオルテガ研究に取り込んだことにより、海外でのオルテガ研究を通したオルテガ理解が日本において進むのである。ここに藤竹が行った考察の一つの意義が認められる。それは藤竹が海外で展開されていた社会学的なオルテガ研究を日本に取り込み、分析を行う契機となった³¹⁾ことである。そしてもう一つの意義についても忘れてはならない。それは哲学を省いた形で社会学の分野におけるオルテガ研究の可能性を提示したことである。第三期までの期間において、藤竹のようにオルテガが提示した哲学領域に着目せず、社会学の領域から『大衆の反逆』を考察した人物は彼をおいて他に確認できない。

こうして藤竹が展開した、『大衆の反逆』

についての考察は、日本におけるオルテガ研究に新たな着想と広がりを与えた。それまで哲学的理解が要求されると思われていたために、『大衆の反逆』に近づくことが困難であった人々に、社会学的観点からの接近を提示した。このことは、先の高橋たちが社会学の分野における定着の契機となったのに対して、藤竹は、オルテガの名を社会学の分野において一般化させることに寄与するのである。

5. 結論に代えて

第三期において、オルテガが展開した幅広い思想がどのような受容展開を見せ、またそこにはどのような特質が認められるかについて考察を進めてきた。最後に、この過程で明らかとなった点について指摘を行い、本論考の結論に代える。

第三期では、様々な学問分野において、オルテガ思想の受容、進展、そして深化が確認された。このことは日本においてオルテガが積極的に論じられたことを示すが、同時に社会がスペインへと目を向けていたことも外部要因として忘れてはならない。そうした中、最も研究が進んだ分野に哲学が挙げられる。オルテガの最も中心的な思想領域である哲学では、研究者の世代交代とともに研究の深化も進み、基本的なオルテガ研究はその役目を果たし、次なる段階へと歩みを進めた。また、本論考では一部しか扱えなかったものの、第三期において初めてオルテガ思想が受け入れられた分野についても検討を行い、経済学や司書論等を提示した。

本論考の中心となった社会学の分野については、社会学者たちによるオルテガへの接近という視点から、まずは社会学におけるオルテガ思想定着の契機を、高橋をはじめとした社会学者たちによって刊行された書に求めた。ここで、哲学と対峙する社会学者の苦悩が次

31) オルテガの哲学、思想全般の分野における海外での研究を日本に取り込んだ第一人者としては、間違いなく、アンセルモ・マタイスがそうであろう。詳しくは拙稿、「日本におけるオルテガ研究の進展」を参照されたい。

第にオルテガにおいて社会学的な部分を見出し、ついには社会哲学という終着点に行き着く過程を検討した。すなわち、ここでは、オルテガの大衆論は哲学と社会学という二つの学問分野に立脚して成立したものであった。

こうして社会学におけるオルテガ思想の定着は、次なる段階として、社会学におけるオルテガ思想の一般化へと移行していく。社会学における一般化、それは哲学と社会学という二つの学問分野に立脚した状態を社会学のみに立脚した状態へと変更することを意味する。そうでなくては常に哲学の素養が求められるからである。こうした、オルテガ哲学を排した形でのオルテガ思想の分析は、藤竹によって成し遂げられた。彼はまったくと言っていいほどオルテガ哲学にふれず、オルテガ思想を社会学的な見地から考察した。ここに至って、社会学におけるオルテガ思想は、本来、その土台であったオルテガ哲学が切り離された形で一般化する。このことの是非については、さらに検討が必要であろう。

参考文献

- 藤竹 暁『大衆政治の社会学』有斐閣、1990年。
今村温之「オルテガの一般教育理論」『一般教育学会誌』2(1・2)、1980年、pp.69-75。
入江隆則他「文春ブッククラブ・スペシャル 二十世紀の十冊 今読めばなお面白い、新しい、ためになる十冊」『文芸春秋』69(13)、1991年、pp.376-387。
木下智統「日本におけるオルテガ研究の進展」『金城学院大学論集』社会科学編9(2)、2013年、pp.94-101。
西部 邁『大衆への反逆』文芸春秋社、1983年。
色摩力夫『オルテガ：現代文明論の先駆者』中央公論社、1988年。
田中久徳「情報社会での図書館員の役割—オルテガの評価をめぐる—」『カレントアウェアネス』147、1991年、pp.1-2。
高橋徹編『マンハイム・オルテガ 世界の名著<56>』中央公論新社、1971年。